

平成 23 年度海外学生派遣事業 報告書

① 基本事項

所属： 総合研究大学院大学 文化科学研究科

氏名： 緒方しらべ

海外派遣先国名： ナイジェリア連邦共和国

海外派遣先大学名： オバフェミ・アウオロウォ大学

海外派遣先大学所属： 美術学部

海外派遣期間： 2011 年 5 月 27 日～2011 年 7 月 11 日

② 海外派遣先大学について

オバフェミ・アウオロウォ大学(旧イフェ大学)はナイジェリア屈指のマンモス大学であり、ナイジェリア初の大学であるイバダン大学(1948 年設立)、そしてナイジェリア最大の大学アマドゥ・ベロー大学と並ぶナイジェリアの由緒ある大学である。同大学は 1962 年に設立されて以来、イレ・イフェ(派遣地域・調査地)の社会・経済活動にも大きな影響を与えている。約 56 平方キロメートルの広大な敷地内には、学部の建物、教員と学生の宿舎、付属の小・中・高等学校、劇場、スポーツグラウンド、モスク、教会、市場などがあり、学園都市となっている。総学生数は約 2 万 5,000 人、教員は約 2,000 人。なお、美術学部は 1969 年に設立されたが、美術のコースは、1967 年より大学付属のアフリカ学研究所(Institute of African Studies、現 Institute of Cultural Studies)で開講されていた。同学部には、毎年約 100 人弱の学生が所属しており、教員は 13 人いる。

わたしの滞在中、大学は梅雨学期(前期)の中盤から終盤をむかえるころだった。学生も教員も、授業や課題、そして試験の準備に忙しくしていた。所属先の美術学部には、絵画、彫刻、染織、陶磁器、グラフィックデザインの教室があり、各教室には朝から晩までつねに学生たちがいて、作品を制作したり、会話をしたり、活気があった。毎年かならず問題になるストライキ(教員、事務職員、または学生によるもの)もわたしの滞在中は起こらず、学生たちは安心して勉学にとりこんでいた。

③ 海外派遣前の準備

今回は、移動・準備期間をのぞくと実質 5 週間弱という短期調査であったため、あらかじめ調査の要点をしぼりこみ、調査内容を明確にして現地入りする必要があった。すでにおこなった長期調査のデータ整理を終え、博士論文の全体構想をつかんだうえで、この 5 週間で集中すべき調査項目をつくった。

④ 海外派遣中の勉学・研究

今回は学部生や大学院生の講義に出席することはなかったが、派遣先大学に到着してすぐ学部長と会い、滞在期間中に博士課程のゼミで発表させてもらうようお願いした。発表についてはすぐに了解を得ることができたが、「現地流」のゆっくりの日程調整で、予定はなかなか立たなかった。「現地流」はすでに承知であったので、学部長にねばりづよく頻繁にお願いに行った。発表日の連絡を受けたのは発表の4日まえであったが、こういったことも予測し、発表の準備はまえもってはじめていた。また、1日数回生じる停電と、電気復旧まで数十分から数時間かかることも考慮し、パソコンなしでも発表できるようにした。結局、当初の発表日は変更となり、さらにその日もまた変更となり、最終決定した発表日の通知を受けたのは発表当日の朝であった。これは想定外でとまどったが、これも「現地流」であり、臨機応変に対応した。

日時の定まった発表はこのゼミ発表のみであったが、滞在時は週末をのぞくと毎日教員や学生が学部におり、自由に質問したり議論することができた。基本的には事前に予約など必要なく、研究室・教室・廊下など、いつでもどこでも、会えば話ができるという「現地流」で、調査ははかどった。携帯電話やイーメールで簡単に連絡をとれないことの多い現地ならではの研究の進め方だ。これは、街での調査でも同様だった。

街では、直接の調査対象(アーティストたち)を訪れてインタビューや参与観察をおこなったほか、彼らの周りの人びと(家族、親戚、友人、社会組織のメンバー、顧客、パトロンなど)へもインタビューをおこなった。短期間の調査であったため、それぞれと約束をして予定通りにものごとを進めることは容易ではなかった。しかしやはり、「現地流」にしたがい、焦らずにひとつひとつやれることからはじめた。

⑤ 海外派遣中に行った勉学・研究以外の活動

文化人類学とは、人間ひとりひとりの人生から文化や社会まで、人間について知る学問である。したがって、文化人類学においては、暮らしのすべてがフィールドワークであり、「勉学・研究以外の活動」はないにひとしい。派遣中に焦点を当てるべき調査と直接のかかわりをもたなかったことを挙げると、滞在地(派遣先)イレ・イフェ内外に住むアーティスト以外の友人たちを訪ねたり、彼らがわたしを訪ねてくれたことだ。授業や仕事、調査の合間に互いに時間をつくって会ったり、休日に料理や食事をしながら、人生のあれやこれを話しあった。彼らと過ごした時間は、博士論文を完成させることを目的とした調査のための緊張感や焦りから解放されたひとときだった。そして同時に、そのひとときこそが、博士論文および今後の研究につながる大切な洞察をあたえてくれるものでもあった。

また、現地でプリント布や染物を購入し、それを仕立屋で洋服、エプロン、巾着、ハンカチなどにしてもらった。「このサイズの、このデザインで」とお願いしても、なかなかその通りにしてもらえないのが「現地流」で、ひとつ完成させるために約3回仕立屋へ通わなければならなかった。しかし、そうした仕立屋

との交渉のプロセスも貴重な経験であった。世界にひとつしかないエピソードのつまったオリジナルの服・雑貨を手に行けることは、フィールドワーク中のたのしみのひとつだった。染物については、調査地のとなりの都市へ行き、数年まえに知り合ったおばあさんに藍染めを依頼した。白い綿の布を持って行き、染める過程を見せてもらいながら、染めにまつわ話やよもやま話をおばあさんから聞けることもたのしみであった。

⑥ 海外派遣費用について

派遣直前、ナイジェリアで新政権が誕生した影響で物価が上がり、交通費や食費をはじめとする、生活や調査にかかわるさまざまな費用が予算をオーバーした。この点については、もう少し事前に友人たちから話を聞くなどして情報を入れておくべきであった。

⑦ 海外派遣先での語学状況

ナイジェリアでは、公用語の英語のほか 300 以上の言語が使用されている。このため、最低でも英語と派遣地域(調査地)での主要言語を話すことが必要となる。また、英語といってもナイジェリア独特の英語であり、発音・イントネーション・単語の使い方などは現地でしか習得できない。わたしの派遣先はヨルバ語が主要言語だが、ヨルバ語にもさまざまな方言があり、まったくききとれない場合も多々ある。さらに、話し手の世代や生活環境によって使用言語が異なるため、聞く際も話す際も、臨機応変に対応しなければならない。このため、調査者にとって言語の壁はかなり厚い。しかし、英語のほかいくつかの言語を挨拶程度でも話すことができると、公用語としての英語を使用する以上に、相手とのコミュニケーションはぐんと深まるものだ。これが非常に重要なことであるので、わたしは意識していくつかの言語を学ぶようにしている。

⑧ 海外派遣先で困ったこと(もしあれば)

とくになかった。

⑨ 海外派遣を希望する後輩へアドバイス

海外は日本国内とちがいで、異なる気候・言語・習慣・常識に直面する場であり、カルチャーショックを受けながら暮らすことになる。日本で生まれ育った数十年間で培ってきた精神、できあがったプライドが傷ついてあたりまえの暮らしになるかもしれない。家族や友人など、信頼できる人とすぐには出会えないかもしれない。そのようなカルチャーショックを受けつつも、それをたのしみ、他者と自分を知ることができたら、海外での生活と研究はきっとより豊かなものになると思う。また、限られた期間で調査・研究をおこなわなければならない、課題は日々山積みといった状況になるかもしれない。だからこそ、渡航する際は、精神的にも、肉体的にも、健康であることが大切である。健康でいられないときは、どれほど課題のプレッシャーを感じようとも、無理をせず、回復を一番にかんがえることが大事だ。

これから海外派遣を希望する人たちも、渡航をまえに、また渡航中に、さまざまな困難にぶつかるか

もしれない。けれどもあきらめずに、しかしけっして無理をせずに、それぞれの課題に励むとよいと思う。無事に帰ってくることを、これがもっとも大切なことだ。そのために、万全な準備を心がけ、健康と安全につねに気をつかいながら、派遣先でかけがえのないときを過ごすことよいのではないだろうか。